

一 児童文学者巖谷小波の経歴

児童文学者巖谷小波誕生まで

巖谷小波（本名・季雄）は、明

治から昭和にかけて活躍した児童文学者です。児童文学の創始者に称せられたり、「おとぎばなしのおじさん」としても親しまれています。

小波の業績というよりは、才

能は、まず作家をあげることができます。同時に、俳人、書、絵、口演、編集、童謡作詞者、脚本、お伽噺の創作者、日本及び世界の昔話、お伽噺の集大成者として、それぞれ名を成さしめています。

小波は、明治三年（一八七〇）六月六日、東京にて生まれました。父は明治の三筆の一人巖谷一六（本名・修）で、後に貴族院議員になっています。

小波が生まれる前についてみます。

小波の父一六は、近江国水口藩二万五千石（滋賀県甲賀郡水口町、藩主加藤家）の藩医の家に、天保五年（一八三四）生まれました。一六が五歳の時父が死んだので、一六の母は、幼い二人の男の子を連れて、実家の京都に帰り、自分分は宮中に仕へ、一六を家業の医師にすべく、医学を学ばせまします。この京における修学が、一六の大転機になってい



きます。

京にて医学、漢学、書を修学していた一六ですが、時は風雲急を告げる京の幕末です。勤王・佐幕の渦中の時代で、一六は勤王の志士と深い交わりをするようになっていきます。

一六が十八歳になると、郷里に帰り水口藩にて医師となり、青年医師として漢法医学と進んだオランダ医学によって活躍すると、医学が繁昌していきます。この頃の水口藩校は、翼輪堂で漢学と武術の文武両方が教えられ、藩儒者中村栗園が主宰していました。一六はこの栗園と手を組み、水口藩を勤王党にすべく、医学をそっちのけにして働き、また京に上っていったのは勤王の志士と深く結び活躍をします。やがて水口藩を勤王倒幕にもっていきましました。

大勢の血を流して、ようやく明治維新がなされ、江戸が東京と改称され、政治も東京が中心となっていく、武士が支配する社会から、君主国家に生まれ変わり、大きな政治の改革がなされました。

一六も明治政府に招かれて、新政府の役人になって、東

巖谷一六・五言絶句

芙蓉子 何割一舉跨
丹鳳詠 向家人詩
新年渴 去夢

巖谷一六の書

京に移り住みます。

一六は、漢学者、医者、画人、書人、漢詩人とこれまた多才な人で、特に書は、中国六朝体書風をもって、日下部鳴鶴と共に、明治の三筆の一人とされています。

小波は、この父の一六から、漢詩、漢学、書を学んでいます。

一六は、小波を家業の医者にするため、小波を幼年期からその道に進むべくドイツ語を学ばせたり、医学予備校に通わせています。

しかし、小波は医学を捨て、文学を選びました。それは次のようなことがあったからです。

まず医者（医学）をきらったことが上げられます。

医学予備校の生徒の時、解剖室かいぼうしつに入ったら、気分が悪くなり、とても医者にはなれないと思った。次に、小波は芝居や舞台が好きでよく見に行っていた。ある時知り合いの医者も芝居を見に来ていたが、これからという場面に、医者いしやの家の人が来て、「急病人があるから、すぐ帰れ」と迎えの車を寄よこした。医者になると好きな芝居もおちおち見れないし、自分の好きなことをする時間も持つことができな

い。これでは医者になれない。と心に思ったからです。文学に志したのは、小波の祖母が宮中に仕つかへるほどの人であったから教養があった。この祖母から、歌の作り方、謡曲、狂言、小説、伝奇でんきなどを面白く教えてもらったことや、祖母のお付きの人から、お伽噺を話上手に聞かされたりし

たことが上げられます。

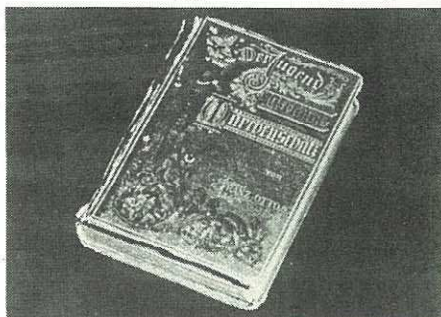
一六は、漢詩のすばらしさを教えてくれました。さらに、小波の長兄立太郎は、探鉱さうこう冶金学きんがくの勉強でドイツに留学している時、ドイツからお伽噺の本、オットナーの『メルヘンシャッツ』を送ってきた。兄は小波のドイツ語を学ばせるのに送ったが、小波はドイツ語のお伽噺に魅みせられ、文学のすばらしさをおぼえ、後に小波を「お伽噺のおじさん」といわせるまでになった出発点です。

このような経過があつて、小波は文学の道に進みました。

児童文学者として活躍

明治維新（一八六八）の大きな政策は、四民が平等に教育を受けられるようになり、学校も各地にでき学校教育がなされたことでした。江戸時代では、高等の学問は武士階級だけのものでした。農・工・商の人々は、読み書きソロバンの寺小屋教育で、更に貧しい人達は、無学文盲の人も少なくありませんでした。

明治初期の教育もやはり漢学中心で、子どものための読みものはまだなく、文語体の儒学じゅがくの教えが主になっていました。



オットナーの『メルヘンシャッツ』

小波は十七歳のころから、新聞等に投稿して、文学を志す仲間と交友を深めていきます。

尾崎紅葉、石橋思案、大町桂月等の文学者の「硯友社」に仲間入りをし、その機関紙「我楽多文庫」に小説等を発表していきます。またその一方では、出版会社博文館にて「少年世界」の編集長として、新しい児童文学を創りあげていきます。

硯友社の仲間の尾崎紅葉とは親しく、俳句結社「紫吟社」などを創立し、紅葉が亡くなるまで友情が続けられます。紅葉は、有名な「金色夜叉」の作者です。この小説は恋愛小説ですが、前半で文学者間貫一は、お宮に振られる筋書きです。このモデルは、巖谷小波といわれています。但し後半の高利貸しになったのは、別の人がモデルになっているようです。

明治二十四年（一八九一）小波二十一歳。児童向けの小説『こがね丸』を発表します。初めての児童小説です。この作品が、児童文学のさきがけになりました。児童向け読ものを切望していた子ども達から大歓迎を受けたのです。この作品が、日本の児童文学の幕明けになったと評価され、小波も自分の進む文学を、児童文学に決めたほどの作



硯友社同人。明治 26 年。左から巖谷小波、江見水藤、尾崎紅葉、中村花柳、大橋乙羽。

(現代日本文学全集 月報 71) より

品となりました。

巖谷小波が文学者として活躍した功績

一、児童文学を創始した。

二、文語体の小説から、口語体の小説にすべく文章を改め、更に送りがなの改革に力を注いだ。

三、日本昔話、日本お伽噺、世界のお伽噺を集め、小波流に集大成したこと。

また、小波の文章は、わかりやすく、ロシアやヨーロッパにて、日本語を勉強する教科書になっていて、広く西欧人に知られ、日本文化を世界各国に広めていった。

四、口演会を各地にて実施し、おもしろいお伽噺をして歩いた。

五、小説家であったが同時に童謡詩人として、多くの作詞をした。

六、俳句にも秀れ、書も確か、これにより小波は、各地の口演旅行では揮毫せめにあっています。そのお蔭で、吉

永地区にも掛軸が残されています。

七、絵本の草分けともいえる「お伽画帳」。「日本一のお伽噺」を、画家と共に出版し、日本絵本の創始者に位置づけられています。

八、小波の門下生、黒田湖山、久留島武彦、木村小舟など多くの文学者を育てています。

このように幅広い文学活動をしています。明治末頃から口演会をしています。大正中頃には、口演旅行で一年のうちでも半分以上旅をしていたといわれています。

デンマークの童話作家アンデルセンと並び称せられることがあります。二人共若い時から優れた作品を発表し、二人共旅が好きな文学者で多才な能力を持っていたからです。小波の『我が五十年、おとぎばなしをつくった巖谷小波』には、口演の時は、天衣無縫てんいむほうになって、ものごとにあまりこだわらない。児童の心になって、児童の立場になって、行う。と記きされています。

小波は午年生うま生まれです。そのため、馬が好きで乗馬にたしなむかたわら、馬に関するものを集めたり、獅子頭ししがしらを蒐集しゅうしゅうしています。



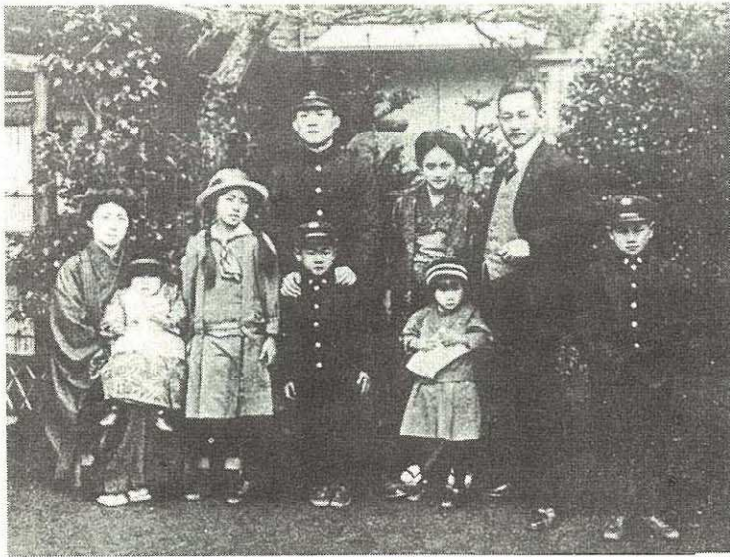
大正10年 小波52歳
(小波お伽全集・第15巻)より

絵は、子どもの時から好きであったが、ドイツに三年間日本語の指導をしている時、油絵を習っていますので、書の揮毫きごうに俳画はいがをよく書いています。

小波は、はじめは「蓮山人ささなみ」と称していましたが、後に「小波」に号なごを変えています。「ささなみ」は、「志賀しが」(滋賀)にかかる枕詞まくらことばで、父の出身の郷里に由来するものです。小波は行く所、行く所で揮毫を頼まれますが、いともす



犬、大虎、狐、猿、牛、ねずみが人間ににせて登場しています。
(三十年目書き直しこがね丸)より



小波と家族。前列左から勇（ゆう）夫人、四男大四、次女三八（さわ）、三男平三、三女きのえ、次男栄二、後列左から長男三一（のち楨一と改名）、長女三四（みよ）、小波、大正5年撮影—巖谷貞子（日本児童文学大系1. 巖谷小波）より

ばやく書きあげてくれています。
昭和八年六月、中国地方の口演旅行中に倒れ、広島県の病院で手術を受け、八月に東京に帰ってきましたが、直腸ガンにより再び入院しました。そして九月五日、六十四歳で亡くなりました。
「重く散って軽く掃かるる一葉かな
極楽の乗り物や^{これりひとは}是桐一葉
何事もあなたまかせの秋の風」
の辞世を残して、文豪は静かに永眠しました。
キリスト教にて葬儀がなされ、多摩墓地に安らかに埋葬されました。

- 8 『こがね丸』（少年文学叢書第1編。明治24年1月、博文館刊）表紙—装幀・武内桂舟。
- 9 『新年狂言 春駒』（幼年玉手函第1編。明治26年4月、博文館刊）表紙。
- 10 『少年世界』（主筆小波。明治28年1月より月2回発行、博文館刊）表紙。
- 11 『安達ヶ原』（日本昔噺第17編。明治29年1月、博文館刊）表紙—装幀・小堀頼音。
- 12 『八咫鳥』（日本お伽噺第1編。明治30年1月、博文館刊）表紙—装幀・久保田米隠。
- 13 『世界之始』（世界御伽噺第1編。明治32年1月、博文館刊）表紙—装幀・中村不折。

（日本児童文学大系1.
巖谷小波）より



10



9



8



13



12



11